

現代日本
文學全集

28

抱月·長江·臨川·伸·孤雁集



吉片中生島

江上澤田村

孤 臨長抱

雁伸川江月

集集集集集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

昭和五年十一月五日印刷
昭和五年十一月十日發行

現代日本文學全集 第二十八篇

編纂者 山本三生

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二



發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四〇番地

改造社

振替東京八四〇
電話芝(43) 二二二〇
四三二二
社番番番番

「抱月・長江・臨川・仲・孤雁集」目次

島村抱月集

卷頭寫眞（照影・筆蹟）……………

序……………

西 鶴 論……………

悲 劇 論……………

厭世觀の三類及び其の要件……………

悲劇の種類を論ず……………

劇詩人と人生觀……………

囚はれたる文藝……………

ルイ王家の夢の跡……………

自然主義の價値……………

序に代へて人生觀上の自然主義を論ず……………

懷疑と告白……………

近松の藝術及人生……………

『人形の家』と……………

イブセンの作詩術……………

メーテルリンダ論……………

沙翁の墓に詣つるの記……………

奈良より……………

清盛と佛御前……………

運命の丘……………

競 争……………

海濱の一暮……………

復 活……………

山 戀……………

故郷の父……………

心の影……………

(附) 眞我 植木屋 眞の生活 生命……………

旬哲學……………

シヨロコ二途 田舎の友人……………

事より……………

リ……………

及サラ・ベルナルのマガダ……………

る辭……………

リ……………

『僕のページ』より……………

の寫生文……………

『覺がき』より……………

『早稻田大學教室』より……………

『覺がき』より……………

同……………

年 譜……………

生田長江集

卷頭寫眞（照影）……………

序 詞……………

圓 光……………

青 花……………

天 路……………

彫刻家とその妻……………

詩……………

やや老いし人の蝸牛……………

ひややかに……………

たちつくし……………

白 躑……………

母 逝……………

弘前の玩具の山鳩……………

月 明……………

お庭の松……………

冬 日……………

くもり……………

月光……………

永久の惡夢……………

二 新……………

一 元……………

我は一つの磁石なり……………

革命と復古主義……………

新 眞 探 論……………

マルキシズムの阿片性……………

蟲のいい人類……………

何故鳶が鷹を生むか……………

(附) 『流行兒』問題にされしことなどより……………

生活を偏重する惡傾向……………

同……………

同……………

同……………

と文壇家より……………

活を偏重する悪傾向」より(四二)

年譜 三〇〇

中澤臨川集

卷頭寫眞(照影・筆蹟)

序 三四四

嵐の前 三四五

新藝術觀 三五七

思想藝術の超然性 三六七

感能のさまざま 三六九

愛は、力は土より 三七一

湘南養綺録 三七五

余の態度 三六二

新社會主義への道 三六七

魔の花 四〇五

(附) ビートルペン(三六六)

同(三五六) 同(三七〇) 同(四)

(三七四) 同(五五六) 同(六) 同(四〇四)

同(七) 『田山花袋氏へ』より

同(四〇) 「知識階級と團結せよ」より(四六)

年譜 四〇六

片上伸集

卷頭寫眞(照影・筆蹟)

序 四〇八

國木田獨歩論 四〇九

アーサー・シモンス論 四一〇

イエーツ論 四三〇

近代文學に對する疑ひ 四三六

思想の力 四四一

生みの苦み 四四五

内在批評以上のもの 四四六

現代日本文學の問題 四四八

無産階級の文學批評 四五三

「否定の文學」 四五五

トルストイの宗教的人生觀 四六〇

現代ロシア文學の印象 四七三

ロシア無産階級文學の發達 四八三

(附) 『薄明の中』より(四九)

『母の眼』より(四二九) 與へる

人(四三三) 何もしないである

時(四四〇) 藝術の味ひ、ナイ

ヒリスト(四四四) 生きてゐる

心持(四七七) 行ふことと思ふ

年譜 四九五

吉江孤雁集

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟) 四九八

緑雲 四九九

楓の森 五〇〇

車の男 五〇四

草叢 五〇七

新緑 五〇

夢の街 五二二

春の風 五二三

死の日 五三三

曇りの天 五三四

夏の鳥 五三八

波の日 五三〇

枯林 五三二

梅雨 五三四

年譜 六〇五

霜の地蔵 五二七

石の蔵 五三〇

蜻蛉の外 五三三

郊外の自然 五三七

都會の自然 五三九

高原の村 五四〇

葡萄園 五四四

墓の庵 五四五

冬の國 五五八

信濃の原 五五〇

橡の葉 五五四

杜の家 五五五

杜の家 五七〇

切株 五七四

松林 五七九

自然美論 五八六

藝術の歩道 五九八

(附) 伐木(二五四) 同(二五六)

同(三五七) 響(六〇七) 『緑の國』

の「序に代へて」より(六七)

年譜 六〇五

島村抱月集

序

抱月島村瀧太郎先生の生涯は大凡三期に分けられる。第一期は明治二十七年東京専門學校卒業後、同三十五年、同校の海外留學生として渡歐される迄、第二期は同三十八年の歸朝を境として大正二年藝術座を組織される迄、第三期は、それから大正七年十一月に亡くなる迄である。この中で、文學者としての先生を見る上に、特に重大なのは、云ふ迄もなく第一期及び第二期である。

本集所載の『西鶴論』『悲劇論』の二篇は、この第一期を代表する文藝評論である。前者は、西鶴の藝術を、所謂性格論の立場から、又文化史論の立場から、後者は、人生と悲劇との關係乃至文藝の一形式としての悲劇を、或ひは哲學的立場から或ひは美學的立場から、精細に評論したもので、文藝批評家としての先生を、終始一貫して特色つけてゐる重大な諸要素即ち詩人の情熱と哲學者の洞察と科學者の分析とは、すでに夙こゝに現はれてゐる。

第二期は文藝批評家としての聲名を一代に恣まゝにされた時代である。こゝに收めた『因はれたる文藝』以下の諸篇は、何れもこの期を代表する。

『因はれたる文藝』は明治三十九年一月再刊の『早稻田文學』第一號の巻頭を飾つたもの。滯歐中の見聞と實感を基として歐洲文藝思潮の根本問題に新しし解説を施したものとて、その細爛無比な文體と共に當時著く喧傳された名篇である。『沙翁の墓に詣づるの記』は豊潤な詩情を流麗な文體に盛つたエプソン遊記であり、『ルイ王家の夢の跡』はプエルサイニ宮殿の建築を論じてロココ藝術の問題に及んだもの、先生独自の領域を開拓した美學上の論文であつて、又、共に先生の滯歐土産の逸品でもある。

『自然主義の價値』は明治四十一年の稿にかゝり、その文藝上の該博な知識とその透徹した觀察と相俟つて、その當時、澎湃として起つた我國の所謂自然主義運動に對して、初めて學理的根據を與へたものであつて、今日からは文化史的にも特に重要な意義を持つたものである。『人生觀上の自然主義』『懷疑と告白』亦其に上記の自然主義論の結論とも云ふべきもの。文藝と實生活との間に横はる態度上、人生觀上の重大な諸問題がそこに暗示されてゐる。

『奈良より』は大正元年十一月の稿。閑寂な古都奈良の藝術と風光とを心ゆくばかり味

た鑑賞的隨筆であるが、そこに又、その頃一身上に大きな變化のあつた先生の隠しきれない心的動搖の影のほかに出てゐることは精明な讀者の誰しも認めるところであらう。其他『メテリリンク論』『人形の家』とイブセンの作劇術』等は、先生が、一面いかに近代劇の研究に没頭して居られたかと云ふことと共に、後の藝術座の新劇運動が、先生に取つて決して偶然でなかつたと云ふことを示す好資料である。

『清盛と佛御前』以下の脚本は、何れも近代劇のテクニクを應用してのされたもの。單に讀み物としてばかりでなく舞臺的にもそれぞれ成功を收めて我が新劇運動に寄與した作である。又、小説『山戀ひ』は、浪漫的色彩の強烈と云ふことを特色とする先生の數ある小説の見本の一つとして、又、トルストイ原作アンリ・バタイユ脚色の『復活』の翻譯は、日本の所謂新劇運動が、これに依つて初めて民衆のものとなつた好記念として、こゝに併せ収録したのである。

本集は、かくして、批評家及び創作家としての我が抱月先生の全貌を窺ひ得るもの。先生の業績を永久に傳へる記念塔である。

昭和五年十月

本間久雄

西鶴論

(人に答ふる書に擬す)

紛々たるかな西鶴の是非、或時はわけの聖と
 たゞへられ、或時は文旨にして書法を知らずと
 嘲られ、此の人、肚裏に一字の文學なしと卑む
 ものあれば、好色の書を作りて活計の謀と
 したる罪人と誹るものあり。『日本文學史』の著
 者は西鶴を評して「深遠なる學識あるにあらず、
 高雅なる思想を有するにあらず、従うて其の作
 何れも猥雜卑陋にして後世識者の譏を免れず」と
 といひ、『好色五人女』の戯刻者は「さはれ西鶴
 は一箇の詩胸を著へしが故に閨巷の些事を見る
 も凡そ眼に觸るゝもの總て自家の詩材に供へし
 かと、彼は小説家にも物語作者にもあらねば、
 元より彼の手腕をもて京傳或は馬琴と比べべ
 くもあらず、彼が述作は足利時代の小話を一轉
 し、分明に一種の浮世草紙派なるものを起し、小
 説世界の一紀源を開き、かど、悉く端物にし
 て廣く人間を観察せしも社會の一部に過ぎず、
 殊に性情を面白く寫せしも其變化流轉する所以
 を詳かにせず、深く世慮と人情との關係する

處を説明せしに非ず、又最高の理想あつて是を
 人事に寓せしにもあらず。されば小説家として
 是を尊ぶこと頗る疑はしく京傳馬琴以上にあ
 るべくも思はれず、思はれざるも彼が價値は毫
 も減ぜざるなり」といひ、また「西鶴と芭蕉は以
 て元祿の社會を代表すべし。共に厭世家にして
 高く超然たりしが、西鶴は放縱に流れし故に、
 唯俳諧に満足せずして其奇才を驅て卑猥なる社
 會を毫も假借する處なく有りのまゝに描寫して
 獨り樂み獨り笑ひ、一般の我が文學者と同じく
 社會的觀念は微塵もなく、破天荒の浮世草子
 は偏愛色道の隠微に渡りきといへり。その他
 彼れを樂天的といふものあり、彼れの理想を粹
 の一字に留むべしと論ずるものあり、知らず、西
 鶴の眞價畢竟幾何ぞ。案ずるに貴論質さるゝ
 の主意は以上の如くに候ふべし。本より西鶴を
 一個人としてそが人品を論ぜんは、彼れの生涯
 を明めたる後の事、且つ道徳上より見ると文學
 上より見るとは、其の間多少の區別もあること

に候へば、茲には社會的に西鶴をあげつらふ
 を止め、旨と文學上より彼れが價値につきて立
 論いたすべく候。中にも

浮世草紙の西鶴

是れ彼れの本面目に御座候。御存知の如く
 西鶴の浮世草紙に筆を染めしは、五代將軍常
 憲公の二年、天和二年に出でし『好色一代男』
 を始と致し、越えて二年、貞享元年、好色二
 代男『成り』、同じ三年、好色一代女、好色五
 人女、『本朝二十不孝成り候へど、翌貞享四
 年には浮世草紙の面目一變して『男色大鑑』武
 道傳來記、『武家義理物語』等となり、相尋ぎて
 『日本永代藏』、『新可笑記』、『本朝櫻蔭比事』、『胸算
 用』のたぐひ見はれ申候。今假に天和二年よ
 り元祿六年西鶴の死せしまで凡そ十二年間を彼
 れの浮世草紙時代といたさば、件の變化を果と
 して文學者西鶴の一代はおのづから前後の兩
 期に分れ申すべきか、即ち前期は『一代男』、『二
 代男』を経て『一代女』、『五人女』に其の圓熟
 の極を示し、後期は『武道傳來記』、『武家義理物
 語』、『永代藏』、『胸算用』などにて代表せらるゝ義
 論に御座候。試に之れを色分けいたさば、無

氣質を素とするものと申すべく、而して『男色大鑑』は一種の異彩として其の間に挟まれ、兩者を可塗するが如き觀有之候。この他西鶴の死後世に出でしものにては、『俗つれく』『萬の文反古』など或は偽作なるべしと論ずる向も有之、且つ思想露骨、文調淺俗のふしもなきにあらねば、偽作ならぬまでも之れによりて西鶴の眞價を窺はんは如何と存候。さて西鶴のいかに人生を觀ぜしかを尋ぬるに先ちて辯ずべきは

西鶴が浮世草紙

の性質に御座候。概して申さば浮世草紙は今日いふ所の小説に候はず、小話或は短き記事文といはば相當り候はんか、因より此處にて、小説といへるに嚴正の定義を下さんとし候はねど、假にも小説と名け得ん限は、脚色を匠みて事柄を面白く敘し候ふか、性情の發展人間の運命を埒き候ふか、何れといたすも單に一場の出来事、一時の心ざまを記述するのみにては、飽き足らぬ心地いたし申候。例へば『二代男』『二代男』『三代男』『一代女』など、表面は主人公ありて首尾一貫するに似たれど、其實主人公を因として事柄を之れに適合せしむといふにも候はねば、きりとして毎別別に一の首尾結構を具ふと定まれるにも候はず、申さば切れくの記事を無秩序に綴り合はせたるに過ぎず、『男色大鑑』『二十不孝』以下の作に至りては、全く小話集の性質を顯し申し候。

ひとり『五人女』のみは、五種の短篇集めたるものなれど、毎篇略々小説の態をなし、西鶴物中にての異色と見え申し候。要するに浮世草紙の性質は小話集にて、西鶴は人間の全運命を觀じて之れを描破せるよりも、寧ろ人間の一部の運命を描破して眞に達せるものと申すべく候。語を更へて申さば所謂氣質を緯として雑多の事件を織りはへたるものにて、西鶴の作は何れか氣質物に候はざらん、とりわけ好色氣質其の主なる部分を占め、武家氣質、商人氣質など之れに亞ぎ候ふべし、只後の其碩、自笑等の如く特に親父氣質、娘氣質と取り出でて申さざりしのみ。まづ『一代男』に就きて御覽あるべし、七歳より六十歳の老人となるまでに三千七百四十二人の女に戯れ、七百二十五人の少年を弄びきといふ世之介が好色の行狀、五十四條は其の事柄こそさまじくなれ、畢竟同輩に候はずや、作者の自白せる如く、世之介生れ落つるより黠しきこと十歳の父と申すべく

女是非なく、御心にかなふやうにもてなし、其後小箱をさがし芥子人形、おきあがり、雲雀笛を取そろへ、これく大事物ながら、様は何にかるべき、御なぐさみにたてまつると、此れにてたらせども、嬉しさうなる氣色もなく、頓て子を持つたらばこれに泣きやます物にもなるぞかし、此のおきあがり其方にて惚れたかして倒けかゝるといひさま、膝枕してなほおとなしきところあり

といへる九歳の少年は、やがて、あれこそ譯知りの世之介さまと持て囃され、廣き世界の遊女町殘らず眺め廻れる當年の世之介と何の擇ぶ所か候はん。例を擧げて論ずるまでもなく、好色道の極意、粹の一字が權化して世之介となりたるものと申さば事足るべく候。既に粹といへる一性情の權化なるからに之れを火に投ずるも、水に委ぬるも變化の妙なく、五十四條の複雑なる事柄は、一條にも納むべく五十四條にも別つべく虚靈なる人間の精神が一貫の特性を具しなから尙五十四條の變化をなすとは趣を別にする次第に御座候。思ふに西鶴が落筆當時の用意も恐らく人間の性情を根本より描破せんなど申す高尙のものにあらずして、只そが好色

界に發現したる結果を面白く寫すにありしものと存じ候、他語にて申さば、西鶴は『一代男』の主人公を描かんとせるにあらざ、むしろ世之介といへる一箇の料客を觀察者の地位に立て、其が周圍に娯集し來る好色界の現象を觀察せしめたるもの、而して世之介はやがて西鶴自身かと存せられ候。勿論西鶴の平生を審みにせざれば、此等悉く彼れの實驗譚なりや否やは明めかね候へど、その中幾分は確に聞視實歴の事柄に材料を取りたるものと見え申し候。さて斯の如く世之介は單に粹の權化とも申すべき言はゞ變通虚靈の性なき人物にして其はまた西鶴の 倅なりといたさば、一見西鶴の心はしかく狹隘にして單調なるものかとの御疑も生ずべし、されどこは怪むに足らず候、世之介を西鶴の作りたる完き人間もしくは西鶴自身の全體と申さばこそ惡しけれ、萬般の好色の現象を一に統べんため總て是等を包容して之が軸となるに堪ふべき圓滿の好色家、すなはち理想的好色氣質を捏成化したるものといはばよろしかるべく候。西鶴の理想を器に譬ふれば、之に好色を盛りたるが粹にして世之介はこれなるべく、更に盛りたる武道を以てすれば武家氣質となり、財事を以てすれば商人氣質と相

成るべし。さればまた一方より言ふときは武家氣質も理想なれば、好色氣質も理想にて、何れも西鶴の一部なれど全體には候はず、西鶴を掩ふの理想は一段大なるものならざるべからずと存じ候。隨うて彼れの人間觀は彼れの氣質と別なること申すまでもなし。次に『一代女』は『一代男』と同調にて、女主人公が十一歳より六十五歳までのいたづらを書き連ねたるものに御座候。但し主人公の女性なるだけ、此方の事柄及びそが觀察の彼方との別趣なること二者相違の第一點に御座候。又種々の好色事件を統轄すべき極致、彼方にては粹又は大通など申す男性的のものに歸し、此方にては遊女氣質とも申すべき複雑なる女性的のものに歸すること、二者相違の第二點に御座候。此等を除き候はゞ『一代男』も『一代女』も共に作者が好色氣質といへる中央點に立ちて周圍の好色界を眺むるものなること、相同じ候。兩書の性質既にかく候上は、之れによりて一面西鶴の好色の極致を窺ふとともに、他面にはその軸として群り來る事柄につき彼れが人間觀の片々をも尋ね難からずと存じ候。『五人女』に至りて西鶴の本領は最も圓滿に見はれたりと申すべきか、この作、『一代男』『一代女』の如く

切れ々なる事柄を強ひて結びつけし嫌なく、毎篇主人公と境遇と、因縁重ね到りて個人の性情おもひの發展を遂ぐる所、五篇の短小説と申すべく、幾分か今日所謂小説の體面を具へ申し候。作者みづからは此の書にも得意の好色の二字を冠し候へど、實は夫の支離滅裂の事柄を狹隘なる好色氣質の埒にて結び廻したる如き『一代男』『一代女』などと異なりて覺束なきながらも人間の全局其の裡に髣髴せられ申し候。西鶴が小説家としての技術及び彼れの纏まりたる人間觀を示すは此の書を第一と致すべきか、さればこゝにては、西鶴が色道の極致とせるものにしてまた幾分か彼れの 倅なる好色氣質を説明いたすに『一代男』『一代女』を以てし小説家として人間の運命を描ける彼れを觀察いたすに主として『五人女』を以てすべく候。其の他色世界を去りながらも猶好色の味忘れず、顧みて武道に恰好なる男色に指を染め、之れをもて武士氣質を彩れるもの、男色大鑑』に候はずや、西鶴の前期と後期とを點綴すとは此の意に御座候。この書、體裁は一章一事の純然たる小話にて、其の中より抽象いたさば、一種の武家氣質を得べく候。更に進みて後期の諸作につきて申さば、『武道傳來

記「武家義理物語」の武士氣質に於ける、『日本
永代藏』胸膈用の商人氣質に於ける、何れも
漸く色道とは相違かり候へど、略々おなじ型と
御承知下さるべし。而して武士氣質は義理を
いのちと致し、商人氣質は財貨集散の秘訣遣
り繰り懸け引きの利巧を眼目と致すとは申せ、
これらはさまざま複雑ならぬものに候へば、取り
出でて論ずるまでも候。まじきか、尤も義理と
申すには説あり。西鶴の掲げる義理は後の作家
が勸懲の念より觀ぜし義理とかはりて、極め
て純潔のものと存せられ候。その故は、後
世の義理は眞吾の底より流れ出づるものに候は
で、只々世間體とか外見とか申す點より割り出
し候もの、即ち形式的人爲のものに過ぎず、
申さば輕薄なる義理に候へど西鶴のは然らず、
眞に我が本然の性より煥發するもの、西鶴の義
理にして、彼れの之れを寫し候や、單調子なが
らも靈氣淋漓、深く人心に通徹する所有之候。
蓋しかゝる相違は之れを時勢の上にも認めがた
からず、西鶴の義はまた

元祿的

と申すも不可なかるべしと存じ候。徳川氏
のはじめ文運未だ盛ならず、雲の如く林の如

き參河武士が創痕斑々の院骨を撫して、一番槍
の功名談に餘念なかりし世は、人々眞率、意を
着けて正義を衒はざるも動作おのづから義理を
離れず候。ひつれど、元祿の一端を越えてのち、
文漸く質に勝ち淫靡蕩敗の餘弊は人を虚儀虚
飾の奴隸と化せしめ候ひぬ。あはれ武道の精英
は發して元祿武士と匂ひしまゝ名残を此に留め
て日に月に銷磨し行き候。劃と何時頃を境と
は定めかね候へど、およそ天和元祿の際を徳川
氏治平の頂上といたさば、此の時代はまさに、
質をもて優れる慶長元和の氣象、寛文延寶の
頤を経て文の衣を着し文質調和の實を示せる
ものと申すべく、人皆泰平にして殆ど無缺とも
見えけん現實の世界に満足して他を思はず、世
を擧げて醉生夢死、いはゆる「花に寐て夢よりち
きに死なんかな」の境に彷徨へる有様候ひき。
されば一方より見る時は此のうち既に不健全の
萌芽を含み候こと勿論なれど、かゝるは歴史
が示す必然の數にして、圓熟の極はやがて腐敗
の端なること、有限の世には免れがたき所に
御座候。元祿は圓熟の極なり、その後は腐敗
の端なり、圓熟と腐敗と相接するのゆゑをもて
圓熟を誦議せんとするは驚くを恐れて火を度す
るの愚と擇び候はんや。天和元祿の社會は固よ

り淫逸華奢に候ひき、しかも淫逸といひ華奢と
いふの性質おのづから後世のものとは異なりて、
眞率なり、一徹なり、眞面目なり、天和元祿の人
の花に戯るゝは、花に戯ると申すよりも、花に
狂すと申すべく、彼等の月に浮かるゝは月に浮
かると申すよりも月に淫すと申すべく、凡そ其
の境に入るときは即ち滿腔の熱誠を捧げて顧み
ざること當時の狀態と存じ候。要するに天和
元祿の社會は情熱的、狂氣的とも評し候はん
か、比較を英のエリザベス時代に取るものある
も此のゆゑに候。今より見れば、丹前姿に六
方を踏みきといふ元祿の伊達男は狂に似たれ
ど、しかも彼等は謙而つくりて之れをなしたに
候はずや。はたエリザベスの紳士淑女は靴尖を
延ばして膝に餘り、帽子に帆を張り二三重に
及べるものありしに候はずや。而して此等の稚
徳却りて可憐の心地するは畢竟眞心流露して
虚偽ならず輕薄ならざるに因り候。この至情
一轉して他方に向ふときは、道義金鐵の元祿的
武士氣質を成すも怪むに足らず候。天地の美
は常に一元を委とし人心の本然はた二元を惡む
の理を會得候はゞ、元祿の社會其の物の甚だ惡
むべきにあらぬを知るに難からずと存じ候。
元祿以後の社會はすなはち然らず、彼等は表面

に義理を説きながら内心必しも之れに應ぜず、もしくは衷心私に憚る所ありながら煩惱の犬制し盡されずして遂に蕩淫身を敗る、何れか輕浮の心根に候はざらん、元祿以上にありては、世間の知ると知らざるとに論なく自家の信する所に従ひて義理をも行ひ淫逸にも耽る社會的眼光を以ていたさば不善に候べし、しかも尙その自己のために自己の信ずる所を行ふの形式は美に候。元祿以下にありて義理も世間のために行ひ、淫逸も世間のために抑ふ、時に結果の善に似たるもの有之も、所詮醜態を免れず候。元祿を境としてかく義理の性質を分ち、さて西鶴を件の潮ざかひに立てるものと致さば、彼れの振りかへりて寫せるは勿論元祿以上のものに候。而して其の善惡ともに滿身の熱誠を捧げて一往直前、他を顧みざるは、之れを元祿的と申すべく、西鶴の作全部に通徹するはこの風に御座候。以下章を改めて西鶴の好色氣質及び彼れの人間觀に論及すべく候。

好色氣質

好色氣質に新説なし、たゞ少しく巨細に論究いたすまでに御座候、之れを内分して粹人氣質、遊女氣質の二といたすことに前に申上げた

が如し。或は粹人氣質など申す事、用語未熟の嫌有之やも計られねど、其はしばらく御見ゆるし下さるべく候。まづ粹人氣質は如何。春のや氏がびとむかし前の戲文の一節に

(前略) 世に粹といふことあれども其傳來も鮮かならねば其本義もまた定かならず或は所謂通をいふ或は今いふ意氣なる者を指す九太夫が由良どんを呼んで粹め〜といふは通人めといふ心なるべく母親の粹な扱といへるも亦同様な心なるべししかして粹な姿といひ粹な調子の爪弾などいへば今の所謂いきな姿いきな調子を指したるに似たり曲草翁嘗ていはく「萬事に心きゝたる者を垂といふ由は柏案驚奇に見えたり水滸傳に垂鬘とあるも同意なり國俗は粹とかくもあり垂は元明の頃よりの俗語ならんか又案ずるに垂は來の俗省は垂の本字にて乖と異なり」といへり云々

また同じく

(前略) 故に粹には三原素あり曰く「情曰く寛恕曰く自敬即ち是なり此三原素を并有して鍊熟其妙に入りたる者は是之を大通と云ふ大通は恬憺無爲大聖のごとく大智識の如し得て名狀すべくもあらず老子の曰く

大徳は徳とせずこゝをもつて徳ありと大通もまた然り外に求むる所なくして自ら守る是大通の形といふべし世人或は粹と通とを混じ或は花柳界の事に明き者を以て直に通となす者あり蓋し誤れりといふべし通は萬事に通ずるをいふ花柳事情に通ずるものは單に老練の標客なるのみいかでか通といふべけんや如何となれば花柳事情に通ずるもの未だかならずしも粹ならず粹なるも亦必しも花柳事情に通ぜざるも可なればなり

といへる、片々たる戲文字に候へど、粹、通など申すもの義は略々相通じ申候。たゞし通の本義はしかく廣しといたさんも、其を花柳界に應用したるものやがて粹かと存せられ候へば、こゝには粹と通とを分たず、むしろ粹を花柳界の事とし之れと意氣とを對せしめて立言いたすべく候。春のや氏の説の外、鶴外氏は曾て

意氣の我を以て彼の領地を犯すものなることは復た疑ふべからず、唯その人を凌ぐや體面を傷らざり、唯その我を以て彼の領地を犯すや趣味を損せず、意氣と云ひ粹と云ひまた通といふ、其確鑿蓋しこゝにあり

といひまた

世に大通と稱するものあり、説をなすものは通より大通に至り、意氣より大通に至るといふ。其誤は平淡を以て絢爛の極なりとするものにおなじ、絢爛豈平淡の前階級ならむや、意氣豈大通の前階級ならむや、大通は始より人を凌ぐ心なし。大通は意氣にあらず、通にあらず、野暮にして偏屈ならざるをいふなり、上品なるをいふなり、高等なるをいふなり。

といはれたれどこれ亦精しからず、餘事は好く措き好色界にて粹と申すは、言はゞ斯の道の極致にして、鴨外氏のいはゆる通、意氣など申す境を通り抜け優に大通の域に入りたるもの候。蓋し鴨外氏の通もしくは意氣とは、着意して通を利かし粹を銜ふもの、したがひて着意の底には利己排他の一念消むを免れず、所謂通の通くさく、味噌の味噌くさき物に候はんか。眞の粹、大通の通はさに候はじ、野暮はたしかに未だ意氣ならざるの名、意氣は着意して粹ならんとするの名、粹は乃ち野暮と意氣との上に選出したるものと存じ候。語を換へて申さば好色道にての野暮とは、未だ意氣の何ものなるかを知らず、隨ひて意氣ならんの意をも有せざ

る心さまに御座候、之れを作文に譬ふれば、些も鍛錬修飾を加へざる稚き文章の如きものに候、若しくは胭脂を解せざる垂髫乙女の無邪氣なるに比べ候。はんか、要するに其の道にかけては猶無縁地にありて全く無心無意識なるものと申すべし。しかもやうやく見聞の廣まり行き候ととも心や、動きはじめて全盛の美むべきを思ふに至るは人心の自然に候、斯くして陰に陽に虚實を盡して全盛あたりを拂ふの用意に汲々たるを意氣の時代とは名け候、文章にてはまさに絢爛綺麗、辭のために辭を聯ぬるものに相當すべく、嫩體の下、春風泣くの少女が長眉畫くべく粧窓親むべきを知れるたぐひにて御座候、すなはち、意識して極致を眞めるの状態にして、凡そ何の社會たるを問はず、それ〴〵の道に入る第一歩は常にかゝるべしと存候。更に粹に至りては此等の兩端を没入して意識無意識の外に優遊するものと申すべく候、又は其のあとを尋ねれば、意識を追ふの極、意識の盡さざるものあるを曉りて不用意自然の我れに還れるものとも見なされ候はん、又は意識の表にては平々淡々他の野暮漢の云爲する所に異ならざるも、しかも應對おのづから節に合して、櫻に霞める春の月紗に裏め

る夜光の壁の含蓄限りなきが如きものに候はん。要は着意して奇を求めざるも奇自然に會し、斯の道に於て他より尊ばれ、さもあるべしと思はるゝ諸性質期せずして一身に洩まるにあり、經驗を極め差別を悉して其を自己の體といふたすにあり、意氣の中より着意の分子、我執の塵を清め去りて無意不識なる姿趣の復び野暮と似寄るにあり、野暮と意氣とを没するにあり、自他の城壁を抜くにあり、本然の我れに還るにあり、同情にあり。眞の同情に滯るものは、野暮來るとき野暮をも容れ、意氣來るとき意氣をも容れ、偏執なく端微なく、事々すべて無碍なるのさかひに出入す、之れ粹の奥義にしてまた大通の實諦かと存じ候。さてかく形式の上にては一わたり粹人氣質の何物なるかを辯明いたし候へど、これのみにては物色いまだ定かならず、いでや粹とは如何なるもの候、やらん、取りわけ西鶴の眼に映せし所はいかに。

生まれながら聖なるものに候はゞ知らず、凡下のものにありては、何事によらず、修行を積み精進を重ねたる後にこそ始めて即身即法の三田地に達し得るもの候へば、粹と通とはた此の數には漏れ候はじ。而してその修行地に入るの第一歩は、粹を極めたる人のおのづか

ら他より尊仰せらるゝを見て已れもこれに倣は
んの意を起すにあること、凡夫の免れざる所
に御座候、所謂意氣の始は是れに候べし、
すなはち様を街ひて他を凌ぎ他より敬愛せられ
んとするに外ならず候。これにも差等あれど
二代女に

今の世のよねのすきぬる風俗は、千筋染の
黄無垢の上に黒羽二重の紋付裾短かに、帯
は龍門の薄かば、羽織は紅とびにして八丈
紬のひつかへし、素足に藁草履はきすて、座
敷つきゆたかに脇差すこし抜出し扇つかひ
して袖口より風を入れしはしありて手水に
立ち石鉢に水はありとも改めて水をかへさ
せて静に口中などあらひ充いひやりて供の
ものに持たせ置きし白き奉書包の煙草とり
よせ吞むなど、のべの鼻紙膝近く置きてか
りそめにつかひすて引舟女郎を招きよせ手
を少し借りたいたく扶より内に入れさせけん
べけにすゑたる灸をかへせ太鼓女郎に加賀
節のぞみて謡うてひくをそれをも心をとめ
て聞かず小歌の半に末社に咄しかけ昨日の
和布刈の脇は高安はだしと褒め此のぢうの
古歌を大納言どにお尋ね申したが拙者聞
いた通り在原の元方に極まりたなどいたり

物語二つ三つ、かしらにそゝらずして萬事
おとしつけて居たる客には太夫氣をのまれ
て我れと身にたしなみ心の出来て其の男す
るほどの事賢く見えて恐ろしく位とる事は
脇になりて機嫌を取る事になりぬ
と申すは意氣の上乗なるもの、強ち身に粹
骨なきも態度の表だけは粹の形を模し得たるも
のと申すべく候。單に嬌客氣質のみにつき
てはいは、此のあたりを其の頂點といたすべく
や。一面より申さば、「一代男」「二代女」「二
代男」「三代男」など、要するにかゝる心意氣
を體する淺薄なる人物と、やゝ複雑なる傾城氣
質と相觸れて生ずる事件を寫せるものに外なら
ず、まことの粹は一段高きものと存じ候。西
鶴はいかにしてまことの消息を傳へ候ひし
か、「一代男」五十四條の何れを見候も、表
面に現れたるは意氣全盛の事柄のみにて、まだ
まだ粹の彼岸は遠しと申すべし。さはれ一人壇
上に立ちて瞰すとき、眼下に集まり來るもの
己れより矮きを極み候はんや、作者が一段高
き處より知らずく主人公の上に放つ光明に
こそ、「一代男」の粹は留め申すべけれ。世之介
十八歳まで部屋住の色ぐるひ、十九歳勘當せら
れて凡そ色界の貧しきかたを流り盡し、三十四

歳にして歸參、「心のまゝ此銀つかへと母想氣
を通して二萬五千貫目確に渡しける」に「何時
なりとも御用次第に太夫さまへ進じ申すべし日
ごろの願今なり思ふものをうけ出し又は名高
き女郎残らず此の時買はいでは弓矢八幡百二十
の末社どもを集めて大大大盡」の豪客の緒を開
き候。までは、さしたる事もなけれど、之れよ
り後の世之介は、全盛以外に分明に一種の光
彩を發し申候。例へば或時は「今日ば諺知り
の世之介さまなれば何隠すべき各々の科にはと
申すうちに夜更けて介さまのお越と申す太夫只
今首尾を語れば其れこそ女郎の本意なれわれ
見捨てじと其の夜俄に揉み立て吉野を受出し」
或時は「一女の心入を驚き様子を聞けば隠れも
なき人の御息女なり請出して直に「波へ送り、
「戀は互の思ひやり自然に身に備はり人の男
を取らるゝ事此のちうの仕出しなり此の心入
のいやな所はさらく戀にあらざ紋日缺かさぬ
程の大じんにばかり其仕方ぞかしと噂せらる
る悪女郎には「四五度も忍び會うてから、正月
の入用御無心の書簡拜しまゐらせ時分から忝
くぞんじ候。金を出して女郎狂ひ仕れば御存じ
の通り此方に好き申候。太夫と久々申しかは
し候貴様よりは只のやうに御申越候程に戀

の暇のなき身なれども折衝合力にあうて進じ申候、餘人を御かせぎあるべし日貸の金子御貸しなされ候はゞ肝いり申すべく候」と眞向より責めつくる類、一方より見れば所謂俠にも通ふべき振舞と申さんか。勿論俠と申すにも等ありて、市井の俠は、大俠の根本より正義を體とするに異なりとは申せ、俠と粹とは畢竟同じ水脈の別なる噴井かと存じ候、大にしては大和魂など申すも矢張り同呼吸に候べし。所詮粹は好色界の俠骨、好色界の大和魂なり、つぶさに色道の坎坷、人情の曲折を経歴して酸きも甘きも噛み分けたる上、其を鹽梅するに濁なき同情の淨味を以てするものに候。尋常の場合にては、何事にまれ己れ專にせんとすれば他を壓するに至ること避けがたき結果に候へど、ひとり粹は然らず、粹は此の際に處してよく自他を調和し、己れ遊興を盡すも他を犯さず、隨つて他をして己れをも犯さしめず、却りて己れの欲する所直に他の樂ふ所に合するものに御座候。哲學者の口氣を假りて申さば、好色界全體の目的とする所と、其内の一員の目的とする所と、所謂平等想と差別想との相即せるおもむき、これ粹に候。粹を銜ふの徒は辯りて以て他を壓するの具と致せど、粹其の

物は、他より尊仰せらるゝの性をこそ有すれ、他を壓せんとはいたさず候。

以上粹の辨稱々贅に似たれど、然らずと存じ候、其のゆゑは、後の作者の粹を掻き候や、多くは外形に泥みて、命脈の繋がる所を觀ず、西鶴の死後二十年ならずして世に出で、善く西鶴の骨を得たりと稱せらるゝ八文字舎の『隈城禁氣』すら既に色道の粹を解して澄空一點の雲氣あるを免れず候、況や其の以下の作者をや。『傾城禁短氣』に

法師さらんせかずしてあくる四つ過に來られ何を驕がしうするぞ山伏などの祈で行くものにあらず我れらが粹の秘密にて此の狂氣をなほして見すべしと座敷へ通り給へば眼すわり息ざし荒く美しき姿はなくて凄じき體相、鐵業つけし齒を鳴らしてさまさまの謔言聞くに身の毛もよだつばかり法師は少しも驕がず煙草盆ひきよせ、心靜かに一服煙らせおどしつけて是れ八雲、所に居て多くの客に壞まれてもまだ粹といふ人を見しられぬと見えたりなせ打ちわつて我が身には深い言ひ交はせの男あればおなさけに其れに添はせてたまはれと包まず心底をあかし我が手前を首尾ようひまは貫はれ

ずして驕がしい、狂言をはじめ飽かれてひまを取らうとはそりや前方なる若手の男に見せたがよい、智この古法師はそんなちよるい手をくふ事にあらずねんごろな男は廊にあるか客にあるかありやうに白狀めされ出しおくれになつて長狂言せらるゝと其方が身は買切ておいた物なれば死なるまで座敷牢に押しこめ置き月日の光を見せぬがなんと雲八坂事はどうちやと星をくはされ覺えず足手が一所へじんじとよつてほろりと涙をこぼし何事も今までのおなさけに御免ありて御機嫌ようおいとま下さるべし深間の男と申すはいたづらものにもあらず我れゆゑに代々家の家を潰して淺ましくならし丹波橋の少六といふ大臣に添はいで心中立たず様子は是れにと少六文を懐より出だし涙片手に見せければ見るまでもなし外に心ある女を不便かはらうのわればある煙管で煙草のむやうなもの煙が傍へもれて我が口の慰にはならず其方ゆゑ身代つづしたる男を忍ぶは情の最上即ち今より暇をやるに二念なくひまをやられし法師の捌き天晴至極の譯知りと今につたへてわるうは言はず

とある、何條心からの粹に候べき。化性を見抜ける法師の眼力は凄きほどなれど、我れ粹顔の手捌きは輕薄とや申さん。まこと不便の心あらば、始より何にも言はずにひまやるこそ粹の極意に候はめ、若し又奸計憎しと思はゞ飽くまでも懲らすが眞の人情に候はずや、何れともつかぬ鼠色は、必竟「下地に名聞利己のごりあれば候べし。此等は未だ意氣の範境を脱せざるものにて、味ひ來れ、色ばかり酔に似たる直し酒のひり」と舌に障る心地いたしか候。此のきはを越して酔手酔の妙境に入れるは獨り西鶴あるのみ、西鶴が好色氣質の貴きはこのゆゑに候。兩刀手扱んでは元祿武士となり、抜き額に六方蹈みては男伊達となり、腰纏萬貫狭斜に豪放しては粹大通となれるもの、これ一代に櫻爛たりし元祿の花に候はずや。爾來徳川のながれ瀰漚うつるひ、逝く水香然春を載せ去りて回らず、我等は只々西鶴の描破せる所によりて其の一端を想望いたすのみに御座候。

次は遊女氣質の説に候。總じて西鶴の好色氣質を寫し候や、女性の方に密にして男性の才に疎なるの傾向之候。こは作者が觀察の自然にも由るべけれど、また實際嫖客氣質の

みにては、きまで多趣なるものならぬに由り候べし、之れに反して吳郎を送り越客を迎へ、朝夕境遇の變に處し、一人の心もて萬人の心を操る傾城の氣質は、勢、複雑ならざるを得ざる義と存じ候。さて「京の女郎に江戸の張を持たせ大坂の揚屋で會はゞ此の上何かあるべき」と「一代男」の好みもさることにて、西鶴の寫せる傾城はおのづから江戸と上方との二色に分れ申候。「一代男」に

(前略) 秋まで残る螢を數つゝみて禿に遣はし蚊帳の内に飛ばして水草の花桶入れて心の涼しきやうなして都の人の野とや見らんと(中略) 假にもさもしきこといはず可愛さのまゝに人のほしがる物は是ぞと巾着にあるほど打明けて物數四十ばかり包みて袖に投げ入るれば取敢へず夜も明けて別れさまに旅の道心者の志うけたきといふ彼の女郎袖の包金を其まゝとらせけるといへる、作者の意は由緒ある身の上を示すにあれど、却りてこれ優にやさしき遊女の心意氣とや申さん。同じく

茲に吉原の各物吉田といへる口舌の上手あり(中略) 萬賢きこと思の外なり山の手のさる御方殊更不便がらせ給ひ數々忝き

御しなし否といはれず外をやめて措に疵などつけてまことの心になつて御いとさきも増すときさる太夫を戀ひ初め吉田の退き端を色々仕かけ給へども一つも憎むべき事あらず或幕方に小柄屋の小兵衛ばかり召連れられ何によらず今日日は限りに難儀を申かけ手をよくのきて遊をかへる。急げと清十郎方に行きて太夫に會ひてそもくより横を行けばや合點して少しも氣やぶらず常の酒振り重ね飲みになつて無理を有になすぞかし(中略) 花も火ともす時分になつて太夫勝手へたちさまに廊下を半すぎて取はづされて其の音に疑なし世之介も小兵衛も横手を打つて面白の春邊やな天晴日露の本たて重ねて出たらば座敷が臭うて居られぬといはう、いや兩人共に鼻塞ぎてあの方からあらためるときに今日よきにほひを嗅ぎに來たと申せ之れにきはめて待てども出でずよもや出らぬ所でないと大笑して見るに衣裳仕替へて櫻一本持ちながら立出づるより二人目をつけて居るに最前尻をこきたる板敷まで來て其所にて心を着け障子を明けて墨の上へ廻らるゝこそ一代の大事こゝなれ小兵衛も聊爾申してはとしばし之

れを黙りぬ世之介も二の足を踏みてかの板敷歩めども鳴らざりしされども出し遅れてゐる中に吉田方より申し出して此のちの御任方總じてよめぬ事のみ始より飽かるゝまでとの御傳へし程今日切りに飽きました御見も今より後はと申し落て表の見世に出て、大にさんたさせて遊ばるゝこそ少しは心憎けれ

大人しき態度、利發なる取り捌き、善きかたより申す傾城の心がけは此の邊に傾べし。此には假に之れを傾城の上方氣質と名くべく、江戸氣質の張り強きものと照り合つて一段の風情有之候。『一代男』に太夫高橋の意氣地を敘して

それ程急な人には會うて面白からずと喜右衛門方に戻りぬ七左方より呼び立つれ共歸らず世之介も戀は互と思ひ太夫を諷め是非行けと申せば今日に限つて日本の神ぞ、行かぬと申すよく、分別を極めよもや先にも此のまゝは措かじ掴みに來る時腰半分切つてやつて、頭此方に置くがと申すいかにも覺悟と世之介にひかせて膝枕してきても命はと投げぶし聞いて居られぬ所ぞと尾張の大盡刀抜きながら切つてかゝれど目

も遣らずして聲も振はず唄ひけるめいめい取付き縁々扱へども聞かず兩揚屋町中袴着て兩方の詫こと入り亂れて親方かけつけ今日は尾張のお客へも世之介殿へも賣らぬとて高橋がたぶさを取つて宿に歸るそれにも飽かず世之介様さらばといふこそ心強き女此の男あやかりものぞかしといひ太夫小紫の豪奢と俠氣とを記して

紫さまお一つまゐれと暴くおさへて襟から膝くだり打ちこぼしたんと氣の毒が顔つきをかし太夫苦しからぬと座をたちて行水取れとて湯殿に入り最前の衣裳つき少しも變らず此は白綾子中は紅鹿子のひつかへし上は淺黄八丈の八たんがけ召しかへられける又上方女郎のせぬ事なり(中略)世之介重ねてたづねければ様子見るに少し足らぬ人を賭にして遣はしけるとさながら見えまますによつて先さまの人憎さも憎しあんな男に逢うてとらしましたといふ

といへる、さて『一代女』の主人公の己れに敵するものには飽くまで憎に、己れに與するものには飽くまで情深き一種の氣象、「此の男嫌うて振るにはあらずかしらに粹顔をせらるゝによつて此方からもむつかしく仕掛」くる

まげじ魂、正しく町の髪結らしく思はるゝ、其の男が全盛顔の憎き一旦は振りたれど、其の男の優しさに心和ぎかけし途端「大臣の聲して、夜の明くるに程近し、われは先へ歸れ、髪結ふ人も待ちかねんと何の遠慮もなく起されける之れを聞くと又こゝろざし替り先に見立てし職の人なればかきかねて浮名の出づることをうたてく其の通りに起きわかれぬる「情より名聞」の念、およそ是れらを江戸女郎のいのちといたし候はゞ、上方氣質と江戸氣質と、相通ずる節も候へど、概して彼方はたしなみ深く利發に、此方は意氣地、名聞を最後の行留まりといたす。藤

なみの細く長う風に靡くを執ねしと見候はゞ、雪折竹の雪に一夜の宿をたにをしむは無情とも見え候はん、されど亦細く長う續くは情に深入りせぬ故にて、太く短く一夜に折るゝものこそなかく、熱情とも申すべく候へ、外に「いかなる粹もいやとはいはぬ遊女の手練、一客からのつけ次第にして做る一遊女の威、遊女の薄情、遊女の莫連いまさら例を擧げて論ずるにも及ばずと存じ候。要するに『一代女』の生涯は即ち遊女氣質の始終にして、上に論ぜし諸性質は其が根じめとなるもの一斑に候。されば遊女氣質の粹人氣質と異なるは、一は女

まげじ魂、正しく町の髪結らしく思はるゝ、其の男が全盛顔の憎き一旦は振りたれど、其の男の優しさに心和ぎかけし途端「大臣の聲して、夜の明くるに程近し、われは先へ歸れ、髪結ふ人も待ちかねんと何の遠慮もなく起されける之れを聞くと又こゝろざし替り先に見立てし職の人なればかきかねて浮名の出づることをうたてく其の通りに起きわかれぬる「情より名聞」の念、およそ是れらを江戸女郎のいのちといたし候はゞ、上方氣質と江戸氣質と、相通ずる節も候へど、概して彼方はたしなみ深く利發に、此方は意氣地、名聞を最後の行留まりといたす。藤